

## 今期テーマに係るこれまでの主な意見

### 1 令和5年度第1回審議会（令和5年8月2日開催）における主な意見

#### ※ 今期における提言に向けたテーマ案等に対する主な意見

(共通)

国際交流に係る論点：「市民・民間主体の国際交流の担い手の確保・育成」

多文化共生に係る論点：「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の確保・育成」

「担い手」という言葉を使うと、特別な人たちがやるものというようなイメージがあるため、「楽しい」、「おもしろい」というようなことを前面に出し、楽しく当たり前にやっていることの結果として「担い手」という言葉が付いてくるとした方がハードルが下がるのではないか。

国際交流に係る論点：「市民・民間主体の国際交流の担い手の確保・育成」

京都市の国際化に対する一般市民の関心度は低い。国際化と言えば国と国との関係のように捉えられがちだが、つきつめれば人と人との関係である。どれだけ市民が自分ごととして捉えてもらえるかが重要だと思うので、何か効果的な施策を打ち出せれば。

既に個人レベルで自分の活動を発信している方は数多くいらっしゃるが、皆がアクセスしやすいツールを活用していくことも必要。行政だけではできない部分について、民間企業や学校と連携しながら進めていくことも必要かと思う。

多文化共生に係る論点：「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の確保・育成」

一般市民の外国籍市民等に対する理解を促進するような取組が重要である。市民しんぶん等の京都市が出すメディアで特集を組み、京都に住んでいる外国人が日本人と同じように暮らしながら、地域活動に参加している等、一般市民の理解を深めていくことがまずは必要ではないか。

外国籍市民等が多く住んでいる自治体として、日本語教育に力を入れるべきだと考えている。駐在員の妻や、国際結婚した女性等、これまで日本で教育を受けたことがない人が増加している。そういう方々は、日本語に接する機会が少ないため、行政としてサポートする必要があるのではないか。コミュニケーションを取り、地域コミュニティに入っていくためには最低限の日本語を話せる必要がある。また、サポート体制の強化によって、京都ファンが増え、それにより京都に住む人が増え、ひいては担い手の増加につながるのではないか。

外国籍市民等が多く居住されている地域でも、自治会の役員などを担っておられる方はなかなかいない。開かれていないと、言葉の壁も当然あるが、心の壁みたいなものがまだあり、お互いにちょっと遠慮し合っているような感じがある。

市民目線でいえば、外国籍市民等と話したいと思っても、何語でしゃべればよいのか等、会話をする前から諦めてしまうようなところがあり、プロの通訳ではなくても、市民と外国籍市民等の間を取り持ってくれるような、国際版民生委員みたいな方がいてくれると、何か変わるものではないか。また、その活動に対し報酬があってもよいのではないか。

## 2 令和5年度第2回審議会（令和6年2月16日開催）における主な意見

### 国際交流に係るテーマ：「市民・民間主体の国際交流の裾野の拡大と担い手の育成」

最近の日本の大学生は、あまり国際化に関心がない、海外にもあまり出たがらないという話を大学の先生から伺った。そこをまずどうやって巻き込んでいくのかということが一步目だと感じる。

一定の共通認識、おもしろさを感じている人たちが集まったときに、それが個人の集まりからグループになっていく。そのゼロを1にするところでは、グループ化するという意味での専門性を発揮できるグループワーカーのような伴走者が必要ではないか。

行政からの発信だけでは、仲間づくりや活動になかなかつながらないので、初めはしっかりと刺激して、支えて、それから見守っていくという、サポートをもう少し手厚くしていく必要がある。

外国人ともっと普通に交流できるような機会を増やし、お互いを知ることが大事だと思う。知るきっかけとして芸術を使うとか、舞台芸術を中心としたイベントをやることが、もっと簡単にできること良いなど感じている。例えばコンサートやイベント後に、参加者が相互に交流できる機会をもつとくれたら良い。また、そういったイベント等々に対して、行政の支援をいただけるとありがたい。

### 多文化共生に係るテーマ：「外国籍市民等の地域コミュニティへの参画と、多文化共生の担い手の育成」

「あなたも「自治会」・「町内会」に入りませんか！」という外国籍市民向けのチラシについて、自治会に関わっておられる方にとっては、近所にも外国人の方がいらしたなという形で意識を高めるのにも役立つかと思う。

京都市のコミュニケーションチャンネルを使って、京都に住んでいる外国人の実態の紹介や、こういう活動している人がいますとか、こういうふうに外国人の家族が生活していますとか、身近な例から少しづつ外国人が住んでいても普通ですよ、別に怖いことではないですよという意識を高める必要があるのではないかと思う。

京都というまちが多様な文化や価値観と共生するコミュニティとして、ウェルカムなんだというメッセージを、リーダー（市長）から繰り返し届いていることが分かるまで発信していただくというのも、間接的に担い手の育成や市民の皆さんの個の意識を変えていくところに関わっていくのではないか。

日本の方と外国籍市民との考え方はどうしてもギャップがあったりするので、それを理解していくために、コンシェルジュのような人が必要になってくる。そういう人が中心になって、交流を促すことができれば良いのではないか。

他都市の取組にあるが、京都としても、外国籍市民からの日常の相談に応じる橋渡し役を設ける制度を、新しい公共という形で、京都発の良いものをつくっていただきたい。

外国人の方を町内会に受け入れるというプロセスを見ていて興味深かったことがある。抵抗を持たれる方が多い中で、ファシリテートの役割に積極的な方がいらっしゃり、その方が周りを説得したり、一緒にやりましょうと誘ったりする役割を果たすことで、外国人の方がコミュニティの中に入っていったのを見たことがある。何か特別なイベントを行って成果を残すことではなく、日常の中でそうしたファシリテータになってくれる人がいるというのはとても大事だと思う。